

【 10 】

氏 名	飯 島 茂 いい しま しげる
学位の種類	法 学 博 士
学位記番号	論 法 博 第 35 号
学位授与の日付	昭 和 49 年 11 月 25 日
学位授与の要件	学 位 規 則 第 5 条 第 2 項 該 当
学位論文題目	カレン族の社会・文化変容 —タイ国における国民形成の底辺—

(主 査)
論文調査委員 教 授 福島徳寿郎 教 授 勝田吉太郎 教 授 高坂正堯

論 文 内 容 の 要 旨

この論文は、著者が、自らタイ国西北部メーホンソン県メーサリエン郡のカレン族部落に定着して実施した21ヵ月におよぶフィールド・ワークから得られた資料に基づき、カレン族の社会・文化変容に焦点をあわせて、タイ国における国民形成 (nation building) のメカニズムを、その底辺において実証的に解明することを目的としたものである。序章 (はじめ)、7章および結語からなり、付録として「ビルマにおけるカレン族小史」と「東南アジアにおける焼畑農業」の二論文が付されている。

序章においては、①国民形成のメカニズムを明らかにするためには、通常政治学的手法とは逆に、中央政府を中心とする視点からだけでなく、国家の底辺、村落レベルからの接近も必要であるとする新しい視点が提起され、②国民形成におけるカレン族の変容過程は、山地系民族集団の「平地民化」として把握られることを明らかにし、③この変容過程を解明するために、発展段階を異にするふたつの集団を比較する方法を採用したことが述べられている。第一章「概況」においては、東南アジアの社会と文化を特徴づける「山地民」の「閉じた文化」と「平地民」の「開いた文化」の対立という枠組みのなかで、カレン族を中心に、タイ国内の少数民族についての概観がなされている。第二章「カレン族の家族と親族」では、山地カレン族と平地カレン族に共通している基礎的社会組織についての考察が試みられている。

ついで、カレン族の「平地民化」の「自生的」の変化の側面が考察されるが、まず第三章「カレン族の村落構造」では、焼畑耕作を経済的基盤として成立していたカレン族の社会において、周辺のタイ系平地民との接触によって水田耕作が導入されることによって変容がはじまり、定着的・地縁的村落が形成されるにいたる過程が論じられている。そして、こうした変容は、農作業の体系における「地域社会的」共同作業から個々の経営単位による「家族労作型」への変化、土地所有観念の変化、村落形成原理における地縁的要因の比重の増大、親族組織の弱体化、村落の行政的自己完結性の低下などの現象となって現われていることを明らかにしている。第四章「伝統的宗教と儀礼」、第五章「村落構造と宗教に千ける変容」で、山地カレン族と平地カレン族のあいだにおける農耕儀礼とかれらの基礎集団の秩序に関する宗教儀礼

の差異、その変容、およびタイ平地民の小乗仏教がカレン族、とりわけ平地カレン族におよぼした影響について考察されている。

第六章「国民形成による社会・文化変容の促進」においては、カレン族の「平地民化」の「指導された変容」の側面が論じられている。ここでは、中央政府の行政政策と国民教育の浸透が、カレン族の社会・文化変容にどのようなインパクトを与えたかという問題について、内務省の山地民対策、その一環としての仏教布教、タイ語による初等教育の導入という三項目を中心にして分析されている。第七章「国民形成の指標」では、「平地民化」すなわち「タイ人」化の進んだ平地カレン族を対象として、村民の「共通語」理解度の調査を行ない、言語を指標とした国民形成度の数量的測定が試みられている。最後に、結語において、「平地民化」という概念についての理論的考察が試みられている。

付録の第一論文は、タイ国におけるカレン族についての歴史的知見の不足を補うために、隣接するビルマ領内のカレン族の歴史を概観したものである。第二論文は、カレン族の伝統的生業形態である焼畑農業をめぐる二、三の問題を、東南アジアという巨視的視野のなかで論じている。

論文審査の結果の要旨

開発途上国における国民形成過程の研究は、近年、政治研究における重要な問題領域の一つとして広く注目されてきつつある分野である。しかし、これまでの研究成果の多くは、国民形成における中央政府の政策に力点をおく巨視的考察か、最底辺部の社会・文化変容に力点をおく微視的考察か、そのいずれかに傾く傾向がみられた。本論文は、カレン族というきわめて特殊な部族を対象としながら、そこにおける社会・文化の変容を、一貫してカレン族のタイ国民化という観点から考察することによって、国民形成過程に対する微視的考察と巨視的考察との接合を試みようとしている点に、その基本的な特色と価値が認められる。

タイ国における国民形成が論じられる場合、これまでは、少数民族の社会・文化変容が「タイ文化」との関連で扱われるのが通常であり、地方文化の役割とその重要性はほとんど無視されてきた。著者は、平地カレン族の言語状況の分析を通じて、カレン族のタイ国民化の過程におけるチェンマイ文化＝ユアン文化という地方文化の役割が積極的意義を強調している。このような国民形成における地方文化の重要性の指摘は、ひとりタイ国についてだけでなく、ひろく開発途上国の国民形成過程の研究にとっても寄与するところが少なくない。

開発途上国における国民形成の実証的研究は、これまでわが国ではほとんど皆無といってよい状態であったが、人類学的手法を駆使し、21カ月という長期にわたるフィールド・ワークによって検証された豊富な資料に基づいてなされた本研究は、政治研究における学際的研究の重要性にかんがみ、斯学に寄与するところが大きいといわなければならない。

よって、本論文は法学博士の学位論文として価値あるものと認める。